

# 自明なことを凝視する先に何が見えるのか

エスノメソドロジー管見

——社会学方法論の研究

水谷史男

人は或る動物が怒り、恐れ、悲しみ、喜び、驚いているのを想像することはできる。だが望んでいるのを想像することは？ では、なぜできないのか。

犬は自分の主人が戸口にいると信じる。しかし犬は、主人が明後日帰宅すると信じることができるか。——それではこの場合、犬は何ができないのか。——私の方はどうやってそれをするのか。——これに対して私はどう答えるべきか。

話すことのできる者だけが、望むことができるのか。或る言語の使用に通じている者だけが、すなわち希望の諸現象はみな（話すという）この錯綜した生活形式の様態である（或る概念が人間の筆跡の特徴を指摘したものなら、その概念は書くことをしない存在者に対しては適用されない）。

ルドヴィッヒ・ヴィトゲンシュタイン『哲学探究』第二部第一章、一七四頁

- 一 はじめに
- 二 現象学から社会学へ A・シュッツ
- 三 現象学的社会学からエスノメソドロジーへ H・ガーフィンケル
- 四 繊細な現実を記述する エスノメソドロジーから会話分析へ
- 五 おわりに

自明なことを凝視する先に何が見えるのか

自明なことを凝視する先に何が見えるのか

## 一 はじめに

いかなる対象をとりあげて、どのような方法で研究を行うかは、いうまでもなく研究者を志したものがまず直面する基本問題である。アカデミックな教育機関の中で確立したカリキュラムなり、制度化された指導の下に研究者としての訓練を受ける場合、その特定のディシプリン内部で標準的とされる方法というものが大抵はあるはずである。自然科学の研究では、多くの場合、実験や観察について踏むべき手続きや道具は決まっています、しかも共同作業で組織的に行われる研究が主流である。だから、研究者はまずはその手続きや道具を十分習得していることが必要条件となるだろう。さらに観測データや研究素材を取り扱う職人的な技能も要求されることがあるかもしれない。

学術研究という活動は、一般には創造性独創性が求められるといっても、巨大化した科学研究内部では、研究テーマや方法の選定から研究計画、巨額の予算の獲得執行からスケジュールまで、自分の意志で決められるのはトップの位置にある研究者だけに集中するだろう。仮にその研究の目的と手法を十分に理解し自分の能力と努力をそこに傾注したいと考える者が研究プロジェクトのメンバーになれたとしても、なすべき仕事の大半は与えられた課題を誠実にこなすことに終始するだろう。

しかし、人文社会科学の研究の場合は、事情はだいぶ異なるはずだ。研究者の卵である大学院生でも、何を研究対象とし、どういう方法で研究するかは、かなり本人が決めることができる。もちろん指導を受ける立場で、師の立つ学問上の立場や方法を学習する以上、何をどう研究するか完全に自由ではありえないし、成果を判定す

る基準も気になる。だが、学習とはそういうものであるし、自然科学に比べれば、研究予算などたかが知れていてそのぶん制約は厳しくなく、相対的に自由度は高いといってもよいだろう。

とはいえ、たとえば社会学の場合、研究を行うための最低限の条件として、たんなる論文の書き方的なアカデミック・リテラシーは当然クリアしているとしても、その先の研究という行為の共通了解事項とはどのようなものだろうか？ われわれはこれまで、社会学というディシプリンのなかで、意味のある知を獲得するにはいかなる方法論が有効なのか、という課題を立てていくいつか考察をしてきた。そこでの当面の見取り図は、コント以来この学問が、基本的には実証科学、そして物質的生産力を拡大するモダン社会の自己認識として、機械論的な物理学を頂点とする自然科学をモデルに、実証主義経験科学の方法を社会現象に適用する研究を追求してきたとまず考える。しかし次には、この実証主義的オーソドックス社会学の立場に同意したくない一部の社会学者たちがいつもいて、彼らは、科学的方法の論理の一部は認めながらも、モノの世界を研究する自然科学と、人間が関与する社会現象の研究をする社会科学とは、対象に向かう基本的な方法と態度において、別のものであると考えた。この分岐が、ここでの議論のまずは入口である。

社会学が社会科学 social science のひとつであるか、という問いは、一応そういうものであると学生に教えることはできるが、少し正確に言おうとするとたちまち厄介なことになる。経済学や政治学や心理学など他の社会科学を称する学問領域の場合も、似たようなことはあり、それでも科学的に対象を分析するという方法論にかんして、社会科学者は数理と実証を武器に一九世紀以来なんとか「科学」たらんとしてきた。モデルは自然科学の方法論である。精緻で専門的な知識を積み上げることにおいて、自然科学ほど確実なものはないのだから、社会科学

自明なことを凝視する先に何が見えるのか

自明なことを凝視する先に何が見えるのか

学もそれを追求するのは当然である、という意見は二〇世紀を通じて支配的になったといってもよいだろう。しかし、すでに二〇世紀の半ばに、当の自然科学について、その真理の探究の根拠を基礎づけようとする科学哲学での試みは大きな転換点に立っていた。

振り返れば、かのM・ヴェーバーも大きな影響をうけている一九世紀末の新カント派<sup>①</sup>以来、自然科学と社会科学との間には研究対象の違いからくる方法論上の違いがあり、その独自性を主張する二元論的な見解はドイツで広く普及していた。たとえば、自然科学が実験観察により現象の因果的「説明」を目的とするのに対し、人文社会科学は直感による対象の内在的「理解」を重視する、という具合に異質なものとする。とくに「理解Verstehen」こそは人間科学の固有性を象徴するものであり、その「理解」の方法論として、デイルタイ以降の「解釈学」が提唱された。

この二元論的立場に対して、経験主義的な「統一科学」を目指す論理実証主義者たちは、科学の方法に二種類はないと考えて、自然科学とりわけ物理学の方法をモデルとしていた。すなわち、彼らは社会科学を自然科学の方法へと還元することは可能であり、そうすべきだと考えて、「科学の論理学」を推進した。科学哲学者野家啓一の要約を借りれば、二十世紀の科学方法論上の論争は、ほぼこれら二つの流れの間の対立と確執であったと言つて大過ないという。とりあえず二元論における相違点について、野家はヘッセの指摘を整理して、自然科学の側から人文社会科学（人間科学という呼び方も行われた）とをわけ隔てる一般的諸特徴として五点をあげている。

(1) 自然科学においては、経験は客観的でテスト可能であり、理論的説明から独立だと見なされている。

人間科学においては、データは理論と不可分であり、事実そのものも解釈によって再構成される。

(2) 自然科学の理論は仮説演繹的な説明を産み出す人為的モデルであるのに対し、人間科学の理論は事実そのものの模倣的再構成であり、演繹的説明よりは意味の理解を目指す。

(3) 自然科学においては、経験について主張される法則的關係は、対象および研究者の双方に対して外的である。人間科学においては、その關係は内的である。

(4) 自然科学の言語は精密で形式化可能であり、それゆえ意味は一義的である。人間科学の言語は救いがたく多義的であり、絶えず個別事例に自らを順応させている。

(5) 自然科学における意味は事実から切り離されている。人間科学における意味はむしろ事実を構成するものである。<sup>(2)</sup>

この自然科学の方法的特徴は、いわゆる論理実証主義者に共通する見解とみることができる。つまり、具体的に言えば、認識者としての科学者から独立した客観的実在を認識対象として措く科学的事実在論、経験的観察の記述と演繹的理論による説明の峻別、データによる検証または反証による理論構築、真理の対応説といった仮定に立っている。これはまた、古典物理学を軸とする近代自然科学と人文社会科学がこうした方法論的に異なる特徴をもっているゆえに、前者はその正確さにおいて後者に優越するという二元論になっていた。

しかし、一九六〇年代に出てきた科学哲学における「観察の理論負荷性」、「パラダイム論」、あるいは決定実験の不可能性を主張する「デュエムクワイン・テーゼ」、そして一九八〇年代末に物議を醸したA・ソーカルに

自明なことを凝視する先に何が見えるのか

自明なことを凝視する先に何が見えるのか

よるスキャンダラスな「サイエンス・ウォーズ」<sup>③</sup>などの新科学哲学ないしは「ポスト経験主義者 (post-empiricist)」たちの見解は、こうした論理実証主義の諸前提を根底から覆す論点に溢れていた。そうした立場を認めると、自然科学と人文社会科学との間に境界線を引く従来の見解を、逆方向で見直し取り扱うことにもなる。ということ、野家は前掲のヘッセの五つの論点、とりわけ自然科学に関する部分は、ポスト経験主義者たちによって、次のように言い直されることになる<sup>④</sup>と要約している。

- (1) 自然科学においても、データは理論から分離できない。何がデータと見なされるかは、理論的解釈によって決定される。
- (2) 自然科学の理論は自然と外的に比較可能なモデルではなく、むしろ事実そのものを見る見方にほかならない。
- (3) 自然科学においても、経験について主張される法則的關係は内的である。なぜなら、何が事実と見なされるかは、諸事実の相互関係についての理論的主張によって構成されるからである。
- (4) 自然科学の言語も救いがたく隠喩的で不正確であり、多大の犠牲を払うことなしには形式化することができない。
- (5) 自然科学における意味は理論によって決定される。意味は事実との対応によってよりも、むしろ理論的整合性によって理解される<sup>④</sup>。

つまり、自然科学においても、認識者（科学者）と認識対象（研究対象）あるいは理論と観測事実との間は二元的に分断されているわけではない、と解釈学的立場に立つ野家は考える。ここでは、対象としての自然現象は、理論負荷性や通約不可能性を孕む自然というテキストとみて、それを読み解くと考えたほうがよい。そこでは一義的な読解（理論と事実との正確な対応）ではなく、複数の可能な読解に開かれた言語的表現に近づいてくるのである。野家はそこで、自然科学と人間科学とを共約的な「テキスト・レベル」の見地から統一的に把握することが可能となるはず、と書いている。<sup>5)</sup>

こうした科学哲学的な、あるいは科学史的な議論には、これ以上立ち入らずにここでは、現代社会学の具体的なありようを見たとき、どうしても無視できないものとして、A・シュツツが亡命したアメリカに撒いた種の発芽として、一九七〇年代はじめに社会学のなかの明確な勢力として登場した現象学的社会学、そしてその最も先鋭な勢力としてエスノメソドロジーに注目したい。いまや日本の社会学界においても、エスノメソドロジー派（あるいは会話分析派）は一大勢力となっている。本稿で考えたいのは、それは一つの研究技術・技法、さまざまな研究対象・研究課題にとって役に立つ便利な道具・手段でしかないのか、それとも社会学にとつてもつと根源的な方法的革命を志向するものなのか、ということをここで考えてみたい。

それにはやはり、現象学の源、E・フッサールに発し、それを受けウイーンで社会的世界に繋げたA・シュツツの理論をみる必要がある。彼が一九三九年にニューヨークに亡命して、第二次大戦後の世界で、興隆するアメリカになかば偶然に、現象学的社会学の種を蒔いたことは疑いないだろう。そして、ここからP・バーガーが生

自明なことを凝視する先に何が見えるのか

自明なことを凝視する先に何が見えるのか

成し、ルックマンが広め、なかならず日・ガーフィンケルが生育した（間接的にせよ）のである。でも、亡命ユダヤ人アルフレート・シュッツは、現象学的社会学が、シンボリック・インタラクションやエスノメソドロジーといった新潮流として注目を浴びる前、すでに一九五九年に亡くなっていた。なにゆえ、シュッツは社会学史におけるこのような位置を占めたのか？それはたぶん、はじめのエピソードとしてパーソンズとの接触という偶然と、そのパーソンズの学生であったガーフィンケルに与えた示唆が、偶然的であったにせよ奇跡的にそれ以後の社会学にいつてみれば、殴り込みをかけたような結果となったということは、もはや学史的な記憶に収まってしまふから、以下ではごく簡単に周知の経過報告と概観をしておいて、本題とすべきエスノメソドロジーに駆けていきたい、と思う。

## 二 現象学から社会学へ A・シュッツ

われわれがふつうに考える「社会」とはいかなるもので、「社会」を知ったり捉えたりするにはどうすればよいか、という問いを立てるとき、二つの違った角度があるでしょう。たとえばひとつは、「秩序のなりたち」から考えようとするもので、社会学でよく出発点におかれるのは、T・パーソンズが『社会的行為の構造』（一九三七）で提示した「ホップズ問題」である。もうひとつは、「生成消滅している現象」を捉える手がかりをどこに求めるかをめぐる議論で、A・シュッツが『社会的世界の意味構成』（一九三二）で示唆した現象学社会学への開鑿としての個人の「日常生活世界への注視」がいまも意味をもっている。ただし、前者の「社会秩序はい

かに成立するか」という問題と、後者の「人々の日常生活での相互作用」に焦点を絞るという方法は、簡単には結びつかない。そこに方法論上の大きな懸隔があるからである。

さらに現象学的社会学の祖と呼ばれるにいたるシュッツの仕事を見ると、主著の『社会的世界の意味構成』が論じている主要な問題は、フッサールの現象学の継承とか哲学的考察ではなく、前半はヴェーバーの理解社会学と社会学方法論の批判的検討、なのである。認識上の拠点として『イデー』などでの「括弧に入れる」とか、後期フッサールの「生活世界」などへの注目は確かに現象学からくるのだが、『社会的世界の意味構成』においては、哲学的考察としてフッサールよりはフランスの哲学者アンリ・ベルグソンの時間論に拠る部分が多いともいわれ、社会的行為論としてのシュッツの関心の中心はヴェーバーの「社会的行為における動機の意味理解」にあるとみられる。そこでまず、現象学から社会学へ、つまりフッサールから抜け出したシュッツの社会学への展開をざっとみてみることにする。

フッサールの現象学の視点は、世界認識の方法として徹底した「科学の基礎づけ」を追求していくと、実証主義が発点とする経験とか観察とかいう態度が、把握・分析の前提に無自覚な謬見（ドクサ・思い込みのようなもの）があり、またそもそも科学が命題の記述や測定の要素に用いる概念や用語自体が、われわれの日常経験から遠く切り離された操作的手段的な構築物であると指摘する。現象学をそうした実証科学の方法論批判として読めば、次に人間行動の分析を試みる社会科学に対しても、自然科学以上にあやしげな実証主義社会科学を批判する立場になることは当然ともいえる。しかし、フッサール自身は、数学から出発して論理学に行き、さらに哲学として現象学を樹立していったわけで、社会科学全般とくに未熟な実証主義を信じているとみた当時の社会学に

自明なことを凝視する先に何が見えるのか

自明なことを凝視する先に何が見えるのか

はほとんど関心を示していない。

先にみた「統一科学」を指向する論理実証主義の隆盛をその拠点でながめつつ、一九二〇年代から三〇年代のウィーンに生きていたシュッツは、ウィーン大学卒業後、学問とは無縁な銀行で為替業務の法律処理の仕事に就きながら、科学という知的営みが経験主義と論理主義、自然主義と客観主義を結びつけ、きわめて人工的で楽観的な合理的世界観を過信することに対する違和感を感じていたはずである。彼はこの問題をフッサール現象学を手がかりとすることによって克服できると考え、フッサールおよびベルグソンの著作を丹念に読破しつつ、同時にフッサールにはない社会現象への関心をヴェーバーの理解社会学を読みこみ批判することで、大著『社会的世界の意味構成』<sup>⑥</sup>を書き上げたのは三三歳の時であった。

その段階で、ウィーン学団と呼ばれた論理実証主義への批判は、ある程度完成しており、ヴェーバー理解社会学の価値も欠点も読み抜いていたとはいえ、それを社会学理論というかたちで完成するためには、ヒトラーの侵攻に追われてパリへ、そしてニューヨークへと移動する運命のいたずらが作用する必要があった。この偶然があつたおかげで、現象学的社会学はアメリカで花開くことになったと結果的には言える。そして、これは偶然とはいえないが、ニューヨークに渡ったシュッツが、一九四三年から亡命研究者のための大学「ニュースクール」<sup>⑦</sup>に腰を据えて、彼がフッサールと並んで大きく影響を受けたヴェーバー理論に関心をもつ数少ないアメリカの社会学者、「社会的行為の理論」の著者、タルコット・パーソンズに接触を求めたことが、ひとつの学史的な事件として後に注目されることになった。

それは、やがて一九六〇年代に隆盛を迎えたパーソンズの構造―機能主義社会学に、シュッツの後継者たちが

敢然と挑戦を挑んだということから、後付けの対決を振り返ることになったからだ。パーソンズとシュッツの往復書簡論争については、その噛み合わなかった論点も含め多くの言及が既にあるので、その後の現象学的社会学の展開に関連して、ここではシュッツの中で継承され変形されたフッサール現象学とヴェーバー理解社会学のあの側面だけに焦点を絞ってみたい。

盛山和夫は、「客観性」を主題とした論考（二〇一三年）で、シュッツの理解に関して、社会学界では間違った解釈が定着していると批判する。

シュッツの社会学に関しては、従来からとんでもない誤解があつて、しかもそれが社会学会での主流派的シュッツ解釈としてまかり通つている。その誤解とは、シュッツが、フッサールと同じように、主客二元論の克服という西洋哲学の長年の課題に取り組み、その探究をフッサールよりも一歩前に進めた、あるいは少なくとも、フッサールにはない新しい可能性を切り開いた、というものである。もう少しわかりやすく言えば、人々の個別的で主観的な意味理解や世界解釈から、いかにして、共同的で客観的な意味世界が立ち現われてくるかという問題に取り組み、それに一定の理論的な進展を示したというシュッツ解釈である。短く言えば、「共同主観性」の問題である。シュッツは共同主観性の問題を真正面から取り組んだ社会学者だ、という見方が広く蔓延している。しかし、このシュッツ解釈は一〇〇%間違っている。彼は一度も共同主観性の問題を自らの探究課題として設定したことはない。むしろ、それは自分がアタックしている問題ではないことを次のように、しばしば明言している。

自明なことを凝視する先に何が見えるのか

自明なことを凝視する先に何が見えるのか

私たちは（中略）いうまでもなく現象学的還元の実行使によってはじめて明らかとなるような、超越論的主観性と超越論的間主観性の問題性については意識的に断念しつつ、「現象学的心理学」を追求する（Schütz 1932訳160）。

社会諸科学は、相互主観性の哲学的諸側面を取り扱わねばならないのではなく、自然的態度をとる人々によって、つまり社会—文化的世界に生み込まれ、その世界のなかで自らの相対的位置を見出し、その世界に対処しなければならない人々によって経験されるものとしての、生活世界の構造を取り扱わねばならない（後略）（『社会科学に対するフッサールの重要性』Schütz 1973訳11110）。

そして、盛山はシュッツが「相互主観性の哲学」を推し進めているかのような誤解をもたらした代表例として廣松渉のシュッツ論をやり玉に挙げている。シュッツが取り組んだのは、ヴェーバーの理解社会学にフッサールの哲学的な現象学が問題にした共同主観性の問題が、あるいは超越論的な現象学における「他我の構成」問題を欠いているから、それを克服する現象学的社会学を構想したのだ、と廣松は指摘する。しかし、これは「ないものねだり」で、シュッツの意図にはないことだったと盛山は述べる<sup>6)</sup>。

ではなぜシュッツに対して、個人の主観的な意味理解や世界解釈から、共同的で客観的な意味世界が生成するという誤った期待が、社会学者を捉えたのだろうか。マルクス主義と唯物論的世界観に立つ『世界の共同主観的存在構造』の著者廣松の場合は、日常生活世界の探求といえども他我の構成が最終的に物象化された客観世界の存

在に結びつく必然性、つまりそこまでいかなければ意味がないのだろうか、シュッツ以後エスノメソドロジーに到る社会学者にとつては、そういう哲学的野心は希薄だろう。それでも、ヴェーバー理解社会学からシュッツ現象学的社会学への展開を、社会学理論上の大きな進展とみるのはシュッツの中のどういう部分になるのか？ 筆者が考える可能性としては、「社会的世界に生きる人びとがその社会的世界について考えたことがらを可能な限り解明すること」を研究の眼目とするシュッツの立場は、まずは現象学的に「主観的」とみられる自我の意識体験から始めて、つぎに自我と関わる他者のもつ意味や動機といったものの存在を考え、そしてその他者のもつ意識体験を理解できるのかと問う、その姿勢に少なからぬ社会学徒が、「客観性」を科学的認識の基礎に置く社会学（社会科学）とは異なる魅力を感じたからではないか。

シュッツの『社会的世界の意味構成』冒頭にあるヴェーバーの社会的行為の「意味」に対する問題設定とは、以下のようなものである。

- (1) 行為者がその行為に意味を結びつけるという言明は、何を意味するのか？（第二章「自己自身の持続における有意味的な体験の構成」の主要テーマ）
- (2) どのようにして他我は有意味的な存在として自我に与えられるか？（第三章「他者理解の理論の概要」の主要テーマ）
- (3) どのようにして自我は他者の行動をその主観的に思念された意味に従って理解するか？（第四章「社会的世界の構造分析」の主要テーマ<sup>⑩</sup>）

自明なことを凝視する先に何が見えるのか

自明なことを凝視する先に何が見えるのか

これに対するシュッツの見解は、「社会的世界の高度に複雑な意味構成において見えてくる現象をはっきり捉えることができるのは、論者がそれらの現象を起源となる一般的な意識生活の根本法則から導き出すことができる場合である」（訳書二四頁）として、これを順番に検討している。（1）については、シュッツは時間概念を導入して「有意義な体験」と「意味のない体験」の区別が、ヴェーバーのように行為（Handeln 英語 action）と行動（Verhalten 英語 behavior）の違いで分けるのではなく、「意味付与的意識体験」であることで行為も行動も同じであるとする。「意味付与的意識体験」というのは、シュッツの言葉では、「経過し生成し去ったある体験に配慮しつつ、これを持続の中の他のあらゆる体験からはっきり区別されたものとして際立たせるような反省的眼差しが、この体験を有意義なものとして構成する。発生的に最初の種を播く『自発的能動性』……への志向的遡及関係が取り結ばれて、そこからそのような配慮において……有意義な行動は構成される。これに加えて、反省的眼差しは、投企、つまり経過したのであろうと未完了時制的に想像した行動についての想像体験をも把握する。そのようにしてこの反省的眼差しは、眼差しのなかで把握した『明確に境界づけられ予め投企された、自発的能動性に基づく体験』を有意義的な行為として構成するのである」（訳書九七頁）とあるように、時間の問題と反省的構成の問題から（1）の問題圏を解いていく。

つまり、人はつねに経過する時間のなかで、立ち現れては消える意識を体験している。そこには一定の整序された意味や目的があるわけではない。それが自分にとって意味のある体験となるのは、一度意識のなかで持続する流れに反省的眼差しを投げ、ある形に構成する必要がある。その場合、過去のさまざまな体験を呼び出してそれをひとつの意味のあるものに構成すること（過去完了時制的意識作用）と、ありうべき目標を設定するように

投企すること（未来完了時制的意識作用）が区別される。

また（1）が個人の意識の現象学的分析をおこなうのに対して、（2）については、日常生活の自然的態度の構成として他者を見るという方法の移動がある。それは他者の体験を自己の体験のように把握するのは困難だと考えるからだ。他者の体験はあくまで観察者として、日常性のなかで現れるものを解釈する以外にない。ヴェーバーはこの点、他者の意識体験など問題にしないで理念型的類型把握で間に合うと考えていたとみられる。シュッツは、他者が何を意識内で構成したかを観察者の意味解釈作用（これを「客観的意味理解」と呼ぶ）から理解する場合と、他者がみずから行う意味構成（これを「主観的意味理解」と呼ぶ）をも観察者は解釈の射程に入れて理解する場合とは、理解といっても形式が異なり、実際に可能なことは観察者も自然的態度のレベルで類型的な解釈を行う、「als ob verstehen」のような「理解になるほかない」。

そこで最大の問題は（3）の、理解社会学の中心にある「どのようにして自我は他者の行動をその主観的に思念された意味に従って理解するのか」、とりわけ他者の動機の意味理解はいかにして可能か、という問いである。シュッツはヴェーバーの「他者の行動の思念された意味」という問題は、「志向的に他者と関連した自我の意識体験」の問題として捉えることが可能だとする。

たとえば、このような例で考えてみよう。電車の中で目の前に坐る女性に挨拶し話しかけようとしている男性がいるとすると、この社会的行動は彼のなかの「自発的能動性」の投企の形でいまこの男性を動かしている、ひとまずみてよい。しかし、その場合、シュッツであれば、五つの層を区別するだろう。第一は彼がこの行動を起こす動機、これは観察からはまだわからない。疲れているから席を譲ってくれと頼むのか、好意を感じて親愛

自明なことを凝視する先に何が見えるのか

自明なことを凝視する先に何が見えるのか

を示したいのか、彼女の態度に不愉快を感じて文句をいいたいのか、いくつか可能な動機が想定できる。第二は、この行動に対して彼女がどう反応するのか。第三は、その反応に対して彼はどのような解釈を得て次の行動に移るのか。第四は、ここで今起きている事態について彼と彼女がある程度共有できる意味理解が成立しているか。そして第五は、これを第三者として観察している社会学者が、ここで起きていることにどのような説明を行うか、である<sup>(1)</sup>。

このような可視的な社会的行動であれば、日常生活世界の自然的態度、つまり誰でもごく日常的に（反省的ではなく即時的に）他者の動機や意図を、たやすく推測し反応していると考えて、そこから合理的な説明が可能になる。この例で言えば、この男性が明らかに虚弱な肉体の高齢者で、坐っている女性が健康そうな若い女性であれば、彼の動機は席を譲って欲しいという意思表示だと想像される。その周辺の座席に座っている者のうち彼女が一番若く健康そうに見えたという環境条件もことを左右する。そして彼女が席を立たなければ、高齢者に若者は席を譲るべきだという社会規範が参照されて、周囲の批難の眼差しも彼女に注がれることが予想される。そして彼女はそれを察知し席を立って譲れば、このシークエンスは完了するが、そうならない場合には問題はさらにこの当事者のより立ち入った「動機の意味理解」を要請しなければならない。

シュッツの提起した現象学的社会学が、近代科学の実証主義や客観主義の方法論的諸前提にたいしてひとつのアンチテーゼであるとするなら、それはまず人間の社会的行為を分析するにあたって、誰もが似たような行動をとり、考えていることも多少の幅はあるにせよ似通っているという「客観性」をもっていて、それを「科学的」に把握することが可能なのだ、という立場に、疑問を呈したことにあろう。シュッツはフッサール後期の生活世界

論を使って、反省的意識による意味と意図の構成を介さない自然的態度を、理解や解釈の手段とする「客観性」の根拠にすることで、ヴェーバー理念型の限界をある意味で示し、同時に観察者自身も含む行為者みずからの意識構成の現象学的凝視を、社会研究から排除することを拒否する、という読みもできるのではないか。そしてシュッツの理論的貢献は認めるとして、それが経験的社會調査の実践にまで到達するには、少々時間がかかった。シュッツについて、もっと検討しなければならぬ問題があるが、ここではエスノメソドロジとはなんであるのかを考えるのが、課題であるから、まずはH・ガーフィンケルへとすすみたい。

### 三 現象学的社会学からエスノメソドロジへ H・ガーフィンケル

エスノメソドロジという言葉は、H・ガーフィンケルに由来するとされる。だが、彼自身が言うように、「エスノメソドロジとは社会のメンバーがもつ、日常的な出来事やメンバー自身の組織的な企図をめぐる知識の体系的な研究だ。この場合、われわれ研究者は、そのような知識が状況に秩序を付与し、また当の状況の一部にもなっているとみなす。さて、こう言ったところでここにいるみんなはエスノメソドロジという言葉が何か特別な意味をもつと思いたいだろう。」<sup>(12)</sup>でもそれはもう言葉が一人歩きしてしまっているので、人びとがエスノメソドロジだと考えて、いろいろおこなうことすべてに彼は責任をもてないと言いつ捨てる。確かに自分たちはエスノメソドロジをやっているのだ、と言うだけでそれはエスノメソドロジになりうる。しかし、それでも、共通理解がある程度あるはずだろう。「共同主観性」「問主観性」といった面倒な現象学的な哲学用語はとりあえず

自明なことを凝視する先に何が見えるのか

自明なことを凝視する先に何が見えるのか

措いておいて、ここで改めて「ホップズ問題」をもう少し具体化して考えてみよう。

新大陸のある人跡未踏の場所に別々のルートで二つの家族がやって来たと考えてみよう。初めは互いに近づかず、その土地の条件を眺め渡すと、利用可能な土地や資源は限られており、二家族が共存できる条件には乏しい、と解ってくる（資源の希少性と限界性の認識）。そこで、ここに定着して安心して生活を築いていくためには、もう一つの家族を排除しなければならないと考えるのは、ホップズのな闘争を必然的に招く。彼らは互いに武器を取って戦いを始める（剥き出しの闘争場面）。しかし闘ってみると犠牲が大きく共倒れで全滅しては双方に意味がないと考える。そこでホップズ的に秩序を樹ち立てるために、提案がなされる。たとえば戦士を一人ずつ出して決闘をし、負けた方がここを立ち去る、あるいは、ゲーム的な賭けをして負けた方が立ち去るといふ提案（交渉と契約の局面）。それでも納得しない場合一方が立ち去るがそのとき娘を交換して、生まれた子は土地や権利の一部継承を認めるという契約を交わす、など現実に文化人類学的な事例を発見することはできるかもしれない。そして、そうした社会契約が繰り返されることによって上位の統治権力が現れ、人びとがそこに権限の一部委譲を合意することによって国家共同体的政治秩序が出現するというわけだ。

元のホップズによれば、各人は最も「合理的な手段を用いて」自己保存を追求する自然権をもつ。そのさい各人は「能力において平等」であるとされ、この能力の平等性から、目的達成に対する「希望の平等性」が生じる。自らすすんで自分の目的を断念する者はいないから、各人が自分の目的の達成のためには、暴力や欺瞞を用いて相手の財産や生命を奪うことも辞さない「万人の万人に対する闘争」という状態が生じるとする。これがホップズの描く自然状態である。

この「能力の平等」から「希望の平等」、そして「万人の万人に対する闘争」へと展開する功利主義・個人主義的な前提は、架空の想定であって、現実には起こりうる事態は、完全な無秩序（カオス）から始まるのではなく、すでに何らかの秩序が成立している中で起っていると考えるべきである。「能力の平等」「希望の平等」というのはあくまで主観的な願望の形象化であってそれが間主観的に構造化されるには、状況認識の共有がなければ「闘争の必然性」も説明できない。

エスノ的な関心からすれば、このような前秩序的な状況を想定した場合、実はそこにすでに他者と自己の間に状況認識の共有（この土地に二家族の共存はできない）や、交渉のための言語的コミュニケーション（言語や記号による意思のやりとり）が成立していることが重要である。「自然状態においても秩序はすでにある程度存在している」ことの確認。そしてそこから社会秩序の構造化を問題にするパーソンズ的な方向から袂を分かち、ガーフィンケルはその社会秩序がいかにして維持され、また変更されているのかに関心を絞っていく。

考えてみれば、「いかにして社会秩序は可能か」という問いは、サンシモンとコントが、フランス革命とナポレオン戦争後の混乱の中で社会再組織の可能性を問うて以来、一貫して社会学の中心問題であり続けてきた。パーソンズはホブズが描いた自然状態のうちに功利主義の論理的帰結を見出した。すなわち、ホブズの自然状態が示しているのは、合理性を唯一の規範として利己的に自己の目的の達成を追求する人間を前提とする限り、社会秩序は論理的に成立不可能であるにもかかわらず、現実には社会秩序はちゃんと成立し機能しているではないか。パーソンズの説明は合理的機能的な社会システムによって、社会規範は人びとに内面化され、その多様な功利的な欲求や行動が秩序のなかで目的合理的に納まっていく側面に注目して理論化した。

自明なことを凝視する先に何が見えるのか

自明なことを凝視する先に何が見えるのか

ここでは社会学者はいわばこの自由で幸福な望ましい社会状態を設計し維持しコントロールする賢いテクニシャンになることができると考える。第二次世界大戦に勝利し、世界で最も豊かで自由な強い国家、アメリカ合衆国の賢い市民を健全で合理的な社会秩序の支配に導くのは、科学的知識によって人々を教育し指針を与える社会学者の使命だと考える思想。

しかし、ガーフィンケルの見ようとしていたことは、方法論的個人主義として出発しつつホップズ問題の別の側面、社会秩序や規範の存在はわれわれに行動や選択の自由を与えているのではなく、いつのまにか当たり前としか意識していない日常生活世界の、なにか重苦しく理不尽な桎梏のようなものに感じられるのはどうしてか、という問題だった。それはまるで動かしがたい現実そのもののように人びとの内面世界を縛っている。だが同時に、それは人間の外に物理的に立ちあがる壁なのではなくて、ひとりひとりが日々行っている日常生活世界の相互作用から生まれている。であるならば、それを凝視し分析していくことで、いかに社会秩序が生成し、変容していくのかも見えてくるはずだと考えた。

その原点ともいべき若きガーフィンケルの最初の著作「カラートラブル」(一九四〇年)は、学術論文ではなく短編小説だった<sup>(13)</sup>。これは彼自身が体験したワシントンD・Cからノース・カロライナのダーラムに向かう長距離バスでの出来事をもとに書かれたもので、同乗した有色人種のカップルとバスの運転手の間に起ったトラブルの一部始終を書いたものだ。運転手は州法をたてに座席の移動を要求しニューヨークから来た女性はこれを拒む。トラブルはどんどんエスカレートしてある結末を迎える。

ガーフィンケルは、一九四二年にノースカロライナ大学に提出した修士論文で、人種間および人種内殺人を素

材に数量的な比較分析をする以前から、人種問題をテーマとしていた。当時はまだ公民権法以前の人種差別が法的にも存在していた。

ガーフィンケルが社会学者としての自分に距離を置いているのは、自分が目撃した事件を社会学の言葉でうまく表現できないためである。社会学の学生であるガーフィンケルの頭に浮かんだ言葉は「階級」であった。だが、ガーフィンケルがこの事件の中に見たのは「利害の衝突」ではなく、「知覚の衝突」であった。ガーフィンケルは、のちに彼が「世界の複数性」と呼ぶことになる問題を表現することのできる社会学の言葉がこの時点ではまだ持っていなかった。この事件が短編小説という形で発表されたのはこのためだと考えられる。「カラートラブル」は「世界の複数性」という問題を文学的な形式で表現したものである。<sup>14)</sup>

バスの運転手や警官は州法の人種隔離を解釈図式にして、黒人女性の行為を無用のトラブルと咎め、彼女は同じ事態を合衆国憲法に拠って「自由な市民の権利侵害」とみなす。これは法律や階級の問題以前に、同じ出来事を異なったものとして知覚する「世界の複数性」の問題と考えるべきだとするヒントをここからガーフィンケルは見出す。この状況を問題のない常識と見なす運転手と警官、これこそ人権侵害と抗議する女性、そしてそれを第三者として眺めている観察者としての学生ガーフィンケル。ここからある意味エスノメソドロジイは姿を現した。さらに、ハーバードでパーソンズの指導のもとで書いた博士論文『他者の近く―社会秩序に関する一研究』(一九五二)で「ホップズ問題」の批判的検討を行っている。

自明なことを凝視する先に何が見えるのか

自明なことを凝視する先に何が見えるのか

秩序の成立を問うことは、科学的研究が拠って立つ合理性の規範そのものを疑って見ることにつながる。ガーフィンケルの批判（それはパーソンズ理論の前提への批判でもある）は、日常生活世界で人々が知覚し理解していることと、それを科学的に研究し特別な道具と方法で分析することで「真実」が見えてくるという「対応説 correspondence theory」を拒否する。対応説とは現実の対象と知覚された対象とは異なると考える、新カント派的な二元論で、一方に観察される具体的存在としての事象が、他方に科学的合理性によって捉えた対象の概念的再現が対応すると考え、両者の間にさまざまな近似関係を想定する。これが科学の正統化に利用されてしまうのは、科学者が対象の本質を決定しうる特権的な観察者の位置にいるからである。そして、観察される行為者も科学的方法に準拠する限り、「行為者と観察者の共同体」に取り込まれる。そして、無知や誤謬や先入見に囚われた行為者は、逸脱者としてこの共同体から排除される。

ガーフィンケルが、このような立場に對置するのはシュッツの「同一説 congruence theory」つまり「知覚された対象と具体的対象とは同一 (same) である」と考える立場である。これはフッサール現象学の志向性の理論に由来するもので、知覚された対象が現実の対象であり、知覚と独立に現実の対象が存在するわけではない、という考え方になる。同一説の立場に立てば、いまここで知覚されているもの以外に現実はないのであるから、科学者が介在しなければ見えない近似すべき現実というものも存在しないし、対象が「本当は」何であるかを決定しうる特権的な観察者も存在しないことになる。

しかもここから出てくるユニークな方法論の試みは、社会学の教科書に書いてあるテクニカル・タームを一切使わずに、ごくありふれた日常世界の人びとの相互行為の記述から、それが人びとに道徳的規範や個人の意識構

成の深みに達する拘束力を發揮していることの暴露をはじめたことである。それを「エスノメソドロロジー」と呼ぼうが、「ネオプラクシオロジー」と呼ぼうが、そんなことはどうでもいい、とガーフィンケルは言った。

成員はこの世界を、「歴然たる当たり前の事実」(natural fact of life)として考えている。しかも、彼らにとり、この歴然たる当たり前の事実とは、あらゆる点で生活の道徳的な事実をなしてもいる。つまり、成員にとつて、物事はなじみぶかいからということだけで、歴然たる当たり前の事実となつてはばかりでなく、それを歴然たる当たり前の事実として受け止めることが、道徳的に正しかったり正しくなかつたりすることにもなるので、物事がまさに道徳的な事実になつているのである。(Garfinkel, 1967, 北澤・西阪訳 三三頁)

これはパーソンズのみならず、近代科学の実証主義経験主義と体系的な社会理論の構築をすすめたいと考えていたオーソドックスな社会学者たちにとっては、一種の叛乱に感じられたとしてもおかしくない。一九六〇年代末に現象学的社会学に惹かれていった若い世代の社会学者と、社会科学としての社会学を自然科学レベルの有用な知識、政策科学や社会工学にまでもつていきたいと考えた社会学者との思想的対立にまで到った兆候は、次の富永健一の言葉にもうかがわれる。

アメリカの現象学的社会学者やエスノメソドロジストたちの多くが、パーソンズに対して強い敵対感情をもち、そのために現象学的社会学とパーソンズ社会学との間に「敵対関係」ばかりを見て、共通する基盤が

自明なことを凝視する先に何が見えるのか

自明なことを凝視する先に何が見えるのか

あることを理解する用意がなかったことは、彼らの視野が極めて狭く、イデオロギー的であったためである。このイデオロギー的要素には、一九六〇年代のアメリカ社会学の若い世代に、現象学的社会学に加えてネオ・マルクス主義の流行があったことが、加わっていた。それが加わったことによって、彼らはパーソンズに対する敵対的態度を強めていた。パーソンズに対するこの二重の敵対感情は、日本ではもつと強かった。<sup>(15)</sup>

パーソンズを思想的に擁護する富永には、エスノメソドロジストの言い分は不勉強な偏見として否定的な評価をもたらす。理論構築に必要なのは、確実な現状把握とそこに役に立つ社会学の希望溢れる可能性を、少なくとも邪魔しないこと。この戦略はアカデミック科学としての社会学の地位を不動にしたい富永からみれば当然のこととで、社会科学とは無縁な現象学など、一種の反動的妄想にすぎない。社会調査論としても、たかだか数十人にインタビュールしたぐらいでなにかが分かったなどという社会学者には、いかがわしさしか感じられないだろう。だが、このあとの展開は、そのような不毛な議論とは別の方向を辿ったと思う。

たとえば、ガーフィンケルがある性転換者のエスノグラフィーにおいてこんなことを述べている。

アグネスは、思慮深さや事前の予測や（ゴッフマンが、彼の分析が正しいとして、すべての情報提供者に告白させたいと望んでいたやり方での）自己表現の管理を、次のような事柄として扱っていた。すなわち、成員たちはそうした事柄を、(a)信頼しているだけでなく、(b)正常さや理にかなっていることや理解可能性や正当性に関して互いに信頼し、かつたがいに対して信頼されたやり方で扱うことを要求し、(c)互いに対し、

思慮深さや事前の予測や自己表現の管理が、日常生活の状況操作の問題において用いられたときにはいつても、互いへの信頼の証拠が提供されることを要求する。アグネスは、こうした信頼にもとづいて行爲することを望んではいた。だが、アグネスにとつて、ルーティーンは、特に慢性的な問題をほらむものだったのだ。ルーティーンこそが、實際的環境を、思慮深く、計画的に、かつ効果的に操作するための一つの条件となるものだったのに。<sup>16</sup>

ここではもはやパーソナル的「客観性」は問題ではないのだが、同時にひとりのアグネスは能動的に周囲の人々に自分をどのように見るべきかを不断に指示し要求する。

もうひとついかにもエスノメソドロジーの実践として注目される例は、ドロシー・スミスが書いた、一人の若い女性が精神病者と見なされていくプロセスを、言葉の構築として読み直していく研究がある。

こうして、いま手もとにあるものをもとにして、Kが精神病ではないというこれとは別の報告を構成することができるようになる。しかし私はただある部分についてそれが可能であることだけを示そう。それは記述にあるKの行動がうまくあてはまるような規則やコンテキストを発見したり、あるいは、Kの行動を書き直して適切なものに変えたりする規則やコンテキストを発見する仕事である。もしこれが成功したら、結果として出てくる記述は、個々の項目を、一つにまとめあげる体系的な手続きが全く欠落した記述になるだろう。個々の行動は単純にもとのさまざまなコンテキストへともどされる。そして今ここにある報告は解体するだ

自明なことを凝視する先に何が見えるのか

自明なことを凝視する先に何が見えるのか

ろう。読み手／聞き手は、一体この報告は「何を言おうとしているのか」「目でわかるような規則を、もはやそこから取り出すことはできないのである。」<sup>17)</sup>

日常生活世界の中で自明な現実として受け取られている出来事が、いくらでも読み替え可能なものであること、そこに常識的に存在しているかに見える規則やコンテクストが、ちょっと注意して見ただけでたちまち怪しげなでっ上げになりうること。そして、それを具体的に示すことは「客観性」に対する破壊的挑戦ではなくて、むしろ確実なりアリティとはどういうものかを探求している、と考えてもいい。

つまり秩序の成立を問題圏とする「ホップズ問題」を契機として、たとえば、エスノメソドロジーに軸足を置く浜日出夫は「ホップズ問題」に對置するかたちで新たに「羅生門問題」を提起する。<sup>18)</sup>

浜の提起した「羅生門問題」とは、黒澤明の映画『羅生門』で示された、ある事件についての説明・解釈が、当事者においても科学的合理主義・機能主義が想定するような「唯一の真実」が限りなく怪しくなる事態を指している。ここを追求していくと盲点のように登場するのが世界認識の複数性であり、その先に見えてくる無秩序の可能性である。人間の社会的行為の記録と説明において、実は整合的な首尾一貫した説明が不可能になるようなカオスの深淵が存在し続けていることへの恐怖が強く自覚されている。

それはエスノメソドロジーの領域での問題に置き替えれば、ガーフィンケルが試みた「違背実験 (Breaching exercises)」に典型的である。違背実験とは、例えば、レストランで空席待ちの列に並んで待っている人に向かつて、空いている席に案内せよと命令したり、友人との何気ない会話の中で、ふつうなら聞かせなくても当然わか

るような言葉の意味を執拗に聞くといった実験のことである。こうした実験は被験者たちを困惑させるのだが、社会的構築に重きを置いて、この実験結果を解釈すれば、人々の暗黙の前提になっている「客観的社会構造」などは、ちょっとしたことで攪乱されるということになるだろう。

ガーフィインケルの『エスノメソドロジー研究』では、「道徳的な事実」がどのようにして成立していくのか、そのメカニズムの解明が行われていた。さらに「違背実験」は、人々が自明のものとしてこの世界を「歴然たる当たり前の事実」として捉えていることを、あえてあからさまに気付かせる作為である。これはあまりに当たり前のことであるために、世界のさまざまな特徴は、「見えているが気づかない (seen-but-unnoticed)」背後期待 (background expectation) となっている。だからこそ相互行為においてつねにこの背後期待を参照することによって、人々は具体的な状況の意味を他者とともに共通に理解することができる。

ここでエスノメソドロジーでは、通常のコミュニケーション理論のように、行為者間に背後期待が構造化され共有されているから、「共通理解」が可能になる、とは考えない。そう言うてしまうと、ヴェーバー的な行為者の「思念された意味」や主観的解釈の解明が必要になってしまう。エスノメソドロジーでは、背後期待を通した共通理解はインデックス的表現や行為を相互反映的に「修復」することによって、そのつど、あらゆる実践的目的にとつて適切な「理解」が達成されているにすぎないと考える。これは「エスノメソドロジー的無関心」へと発展していく考え方である。違背実験は人になにを気付かせるのか、という点で山田富秋はこのように言う。

この問題についてガーフィインケルの有名な実験がある。ノートの右に実際の出来事を書き、左側のその内

自明なことを凝視する先に何が見えるのか

自明なことを凝視する先に何が見えるのか

容をできるだけ忠実に説明していくというものである。結果はといえば、内容を説明する作業自体が不可能な課題であり、「できるだけ忠実に」という命令によって、そのつど無限に説明を詳しくすることができたのだ。それどころか、「できるだけ忠実に説明せよ」という要求に対して、彼の言ったことは信用できるとか、私は正直だといった「道徳的な」ことがらに訴える行動がしばしば見られたのである。つまり共通理解は実質的な内容の共有ではなく、成員の活動の道徳性を表示することによって達成されるのである。<sup>19)</sup>

ここでエスノメソドロジの格率ともいべき特徴を整理して、なにをすればエスノメソドロジになるのか、あるいはエスノメソドロジであるためには何をしてはいけないか、を列挙してみよう。

- (1) 観察者（科学者）と被観察者（研究対象）との間に非対称な関係を前提しない。つまり観察者だけが客観的な視点をもって真理を追究するという特権的な立場をとらずに、観察者もまた日常生活世界の中で自然的態度をとる存在という場所から出発する。
- (2) 現象あるいは人間の相互作用としての行為を記述し説明するさいに、先験的（科学的）な概念・用語・理論を持ちこむことを拒否する。つまり行為者がその時その場で自明当然と思ったり話したりしていることを、まずはそのまま記録し、そこからなにが起っているのかを日常言語で理解することを目指す。

- (3) 行為者の「動機」の「意味」の「理解」を、個人の「心（内部）」にすでにあるものが状況に応じて

身体行動として発出すると考えるのではなく、他者との相互行為場面で生成し変容していくものとして捉える態度を重視する。とくにそれは、言語行為を手がかりとする戦略が有効だと考える。

(4) これらの研究態度を方法的自覚をもって行うことで、人々の社会的相互作用としての行為によって成立している「秩序」とその変容過程を、「秩序の自明性」と同時に「秩序の構築性」を気付かせることによって、社会的世界の微細で正確な記述のみならず、その変革をも構想する。

このような発想は、源はフッサール現象学やシュッツの著作に負うところが大きいとしても、「エスノメソドロジー」という命名から始まって、その後の社会学におけるエスノメソドロジーの定着はやはりガーフィンケルの功績ということになるであろう。しかし、ガーフィンケルが切り拓いた道は、さまざまな変奏を遂げながら、七〇年代の構造機能主義批判や実証主義社会学への懐疑の段階から一步を進めて、やがて会話分析という独自の方法を編み出すことになる。

ガーフィンケルに導かれた「エスノメソドロジー」運動は、さまざまな論者によって次々に展開していつて、一九七〇年代以降は社会学としてなにか「エスノメソドロジー」なのか必ずしも明確でなくなり、それでも二つの点で社会学という領域の中ではある立場として明白に存続していると思われる。それは、ひとつは社会現象のなかで具体的な個人の相互行為に焦点を絞って、そこで採集された言語や行動の示す「意味」を解明するという特殊な技法、として広く応用可能な価値中立的な「分析法としてのエスノメソドロジー」、あくまで合理的理性的な技法としての「エスノメソドロジー」である。もうひとつは、社会学あるいは社会科学という、人間の行動

自明なことを凝視する先に何が見えるのか

自明なことを凝視する先に何が見えるのか

や意識を研究する活動が自然科学を達成モデルとする近代科学の前提を、方法論的に（哲学的にはなく）乗り越える、あるいは批判する「思想としてのエスノメソドロジー」である。

あえて言えば、このふたつが個別テーマとしてのさまざまな社会問題へのエスノメソドロジストの態度を、認識の領域と実践の領域、行為者の動機や意味解釈の問題と当事者と研究者との間の係わりの問題、日常性の細部に徹底的にこだわるミクロな視点と共同主観的な大量現象の総和的なマクロな視点との分裂を、いずれにせよ突きつけることになる。これに明確な態度を示したのは、「会話分析」を武器とするエスノメソドロジストだと考えるのは筆者だけではあるまい。

#### 四 繊細な現実を記述する エスノメソドロジーから会話分析へ

言い訳めいて聞こえるだろうが、筆者は社会学においてエスノメソドロジストとは距離を置く立場にある。それは標準的な社会調査という実証主義的な場所で、研究の出版をしたという半ばは偶然的な要因にもとづき、現象学にもエスノメソドロジーにも本格的に取り組むことがなかったという事情による。こうして現代社会学の方法論を検討するという課題を自らに課してみると、いくつか浮かんでくるテーマがある。ひとつは、エスノメソドロジーはたんなる便利な研究の技法・方法なのか、それとも学問上の独自の主張にもとづく立場なのか、あるいは学問という狭い世界を越えて、個別の社会問題にかかわる実践的な活動ないし運動なのか、という問題である。筆者にはこの点、まだ解答は得られていない。

実際に行われているエスノメソドロロジーによる研究を見ると、各種の社会問題、医療・福祉、差別・格差、フェミニズム、犯罪・自殺、家族・小集団など、社会学が扱うあらゆる問題についてエスノメソドロロジー的研究、そして会話分析という手法は、広く応用されている。なかでも「会話分析」を主な手法とする研究は、どのようなテーマにとっても一種の便利な分析ツールとして定着しているように思う。「会話分析」は、実際に行われた相互行為の会話という言語的データ（そこには間合いや沈黙や発話の重なりも正確に記録される）と、補足的に画像データとして表情や身振りも加わって、「経験的データ」という意味でも新たな領域を形成している。しかし、これは従来の実証主義的社会調査法とは、出自を異にすることは、われわれのこれまでの考察からもわかるであろう。

ビデオカメラという道具が活用される条件もすすんで、録音・録画は非常に効果的なデータ収集手段になっており、会話分析を行うにはトランスクリプトも誰にでも可能なものとなっている。その記録については標準化されたルールがあり、一定の訓練を経れば誰でも会話分析のデータは作れるようになっていく。では、たんなる当事者へのインタビューによって記録された文字となったものと、エスノメソドロロジーの方法的自覚と技術を元に記述された会話分析とは、何が違うのか？

ちなみに、インタビュー記録をオーラルな語り、あるいは質問と返答という形を取る会話と考えれば、社会学では生活史をはじめ数多くの記録があり、それらは文字として記録されている。そうしたインタビュー記録と、エスノメソドロロジーの会話分析は方法としてどこが違うのだろうか？

エスノメソドロロジーではないひとつの事例として、在日朝鮮・韓国人の戦後史を追っている朴沙羅の論文にあつ

自明なことを凝視する先に何が見えるのか

自明なことを凝視する先に何が見えるのか

たインタビュー会話を見てみよう。一九四五年の日本の敗戦時、日本帝国の植民地であった朝鮮半島で解放された人びとのうち、祖国に帰還するのではなく敗れた日本本土にあえて危険を冒して渡航しようとした人びとがいたという事実を確認するために行われた当事者へのインタビューの一部抜粋である。

L..さんは釜山から漁船で対馬に向かい、対馬から定期船で下関に向かった。

L..やからその、連絡船の時に、みんなこう、チュックしとるわけですね（笑）。ようするにその、密航でくるとかどうかいいうことは、わかったらおおごとですかからね。

..そうですね。

L..もう、すぐわかりますからね。

..あ、わかるんですか。

L..ああ、分かるわ、絶対。

....どういう風にわかるんですかね。

L..もう服装とかね、ようするに、見たらわかりますわな、だいたいは。

....そうなんですか。

L..はい。

....え、服装かえたり…。

L..服装かえても、まあだから、子どもたちはわかりませんが、大人はわかりますわね。顔見たただけでも

だいたい、韓国人ちゅうのはわかりますしね。

・・・あー、そういうもんですか。

L…はい。<sup>(20)</sup>

このインタビューを会話として正確に記録する意味は、歴史的な事実を記録し確認するという意味と同時に、当事者がそこで何を考えたかをインタビューアが聞きだすという相互行為の記録でもある。これを会話とみれば、(笑)を含めて言葉のやりとりと間というものまで記録する必要がある。ただし、エスノメソドロジの会話分析ほど精密な記録ではない。このインタビューでは、この部分に先行する質問が形成した文脈、おそらく釜山から漁船で脱出し、対馬に渡る密航の理由を話したと思われる。そしてここで連絡船に乗る際、韓国人だと見破られないようにチェックをしたと語るけれども、その文脈に反するように、隠してもすぐわかってしまうという答えになる。インタビューはこの矛盾に少し混乱を感じて、質問を重ねている。日本人ではないとわかるといいながら、現に下関に到着しているのはなぜか、という疑問はこの後でないと判明しない。つまり、これは完結しない会話になる。

エスノメソドロジの会話分析がとりあげる会話は、このようなインタビューと回答者という会話上の役割が固定したものよりは、相互行為の交差場面で完結したものを選んでとりあげる。たとえば、次の「先行連鎖」とよばれる例である。

自明なことを凝視する先に何が見えるのか

自明なことを凝視する先に何が見えるのか

- 01 A… 明日ひま
- 02 B… ひまだよ
- 03 A… じゃあ映画でも行こうよ
- 04 B… いいね<sup>(2)</sup>

03行目でAがBを映画に誘って、04行目でBはそれを受諾する。この「誘い―受諾」の隣接ペアの前に、01～02行目の誘いが予測可能とするもうひとつの隣接ペアが置かれている。02行目のBの答えが「ひまだよ」であることで、誘いが受諾されることが期待できるが、「明日は忙しい」と答えられたら誘いは控えられる。それでも「夜も用事があるの？」ときけば誘いの中身次第では乗る可能性もある。だから01～02の隣接ペアは完結した独立ペアではなく「誘いに進むための促し」となる先行連鎖と見ることができると分析する。これが典型的な会話分析の手法だとすれば、そこでもし「理論」というものがあるとすれば、この会話によって生成し成立している言語規則だけである。

会話分析を中心的手法とする西阪仰は、エスノメソドロジーの方法的特徴について以下のような説明を行っている。

合理的諸特徴を、私たちは自分たちの活動のなかで、その活動の過程における様々な偶然的な条件に依存しながら、きわめて精巧なやり方で成し遂げる。発話の組み立て方、発話以下の議論は、このエスノメソド

ロジックのプログラムに従っている。上で論じた「仕掛け」は、行為・活動のための行為者たち自身の「方法」であり、その仕掛けが行為者自身の可能な記述・可能な表現を離れてはありえない限りにおいて、それは行為者たちの自身の「方法論」でもある。それは、社会のあらゆる細部に見いだすことができる。かつてハーヴェイ・サックスは、「社会の中にゴミはない」と言った。つまり、一見どうでもよいような微細な現象（ちょっとした言葉の重なり、ちょっとした間合い、ちょっとした言い間違いなど）が行為・活動の組織化にとって重要な意味をもつことがあるということだ。そのような微細な振舞いを私たちは方法に従って組織立ったり方で用いながら、行為・活動を組み立てている。<sup>(22)</sup>

この場合、その方法はそこから経験的な一般化を追及したり、なんらかの仮説を作って検証や反証を行うことを目指す「経験的調査」ではない。このことを説明するのに西阪はE・A・シエグロフの電話の開始の例をあげている。

シエグロフの手許にはアメリカでの電話のやりとりが五〇〇例もあった。そのうちのほとんどが、受け手が最初に「Hello（もしもし）」と言っており、かけ手のほうが最初に「Hello」と言ったのは、たった一つの例しかなかった。もし経験的一般化を目指すのであれば、五〇〇例中一個の逸脱例などさっさと無視して、「受け手が最初に話す」とでもものべておけばよいことになろう。しかしながら、シエグロフが実際にやったことは、この一つの逸脱例に議論を集中して、その逸脱例がいかに秩序だったしかたで「逸脱」的であるか

自明なことを凝視する先に何が見えるのか

自明なことを凝視する先に何が見えるのか

を、示していくことだった。その例とは、次のようなものだ（原英語）。

(1)

（受話器を取る音。そのあと一秒間の沈黙）

かけ手 もしもし

受け手 アメリカ赤十字です

かけ手 もしもし、警察ですが、……

問題は、受話器を取る音につづく約一秒間の沈黙である。この沈黙は、じつはたんに事実として音声がないというだけではない。それは「返答がない」こととして観察可能である。いいかえれば、あるべきものがないのだ。そして、そこに「返答」があるべきなのは、それに先立って、返答するべき何かがあるからにほかならない。つまり、電話の呼び鈴は、ある種の「呼びかけ」なのである。

（中略）

このシエグロフの分析の含意は重要である。たんに、一つの逸脱例は、他の499例と矛盾しないかたちで説明できるだけではない。むしろ、逸脱例をみることによってこそ、他の事例で何が行われているのかも、よく見えてくる。つまり、シエグロフは、けっして経験的（行動）パターンをみつけようとしていたのではなく、あくまでも、わたしたちが何をどうやっているのかを、すなわち、わたしたちの「やり方の知識」を解明しようとしていたのである。シエグロフは、ある意味で、「呼びかけ」や「返答」にかんする、わたしたちの「自

然の直観」を手がかりにしながら、あるいはこの直観について、論じている。

にもかかわらず、シエグロフが右のような分析をなしたのは、たんに想像による事例（だけ）ではなく、実際に起きた会話の録音をもちいているからにほかならない。

（中略）

このようにいっても、経験的事であること（つまり、実際に起きたことの録音・録画をもちいること）は、やはり便宜的にすぎないのかもしれない。しかし、たとえ便宜的にすぎないとしても、重要であることに変わりないと思う。<sup>(23)</sup>

エスノメソドロジーの試みの中で、なにが正統な流れかなどというのは問うほどの意味がないとしても、実際に行われた会話、それもとて短い時間の全会話に、どこまで集中して分析ができるかという挑戦は、確かに社会研究の技法としての先鋭な威力を発揮する。そして、さまざまな相互行為のうちで言語、とくに自然言語による会話を取り出してそこを凝視するという方法は、シュッツやガーフィンケルとは少し角度を変えた哲学的立場も必要になってくるのかもしれない。それがL・ヴィトゲンシュタインの後期の『哲学探究』における言語ゲーム論につながる。

第一に、決して私たちがそれを知らないわけではないわけではない。第二に、私たちは自分でそれを、その時々の実際の目的に応じて十分なやり方で表現することができる。第三に、それはいかなる意味においても、命題の

自明なことを凝視する先に何が見えるのか

自明なことを凝視する先に何が見えるのか

集合のようなものとして与えられてはいない。もう一度断片(0-1)の10-11行目のやりとりを思い出してみよう。

(0-1a) [TB]

10 C : ↓ .hh (08) 薬は飲んだかい？

11 A : ううん…、のんでないけど もう大丈夫、

11行目でAがこのように語ったことを、いまA自身がおぼえているとは考えにくい。もしいまAに、かれがこんなふうには、最初に質問に答えたあとで、「もうたぶん大丈夫」と言って(Cの発話により示された)アドバイスに答えていたと言うならば、かれは自分がそんなふうにしていたことを知って驚くかもしれない。しかし、質問に答えたあとでアドバイスを拒絶したのは、Aが、このCとの会話のなかで、まさにやっていたことにほかならない。少なくとも、私が記述もしくは表現を与えていこうとしているのは、本人たちがやっていることであり、そのやり方である。本人たちは自分のやっていること、そのやり方を決して知らないわけではない(たとえば、知っているとも言えないとしても)。かれらは、(たとえば必要に応じて相手に説明するために)自分でそれに(しかるべき)記述もしくは表現を与えることもできたはずだ。このような可能な記述・表現を求めながら、それを整理して「見通しの良い記述」を与えること、これが以下の諸章で試みようとすることである。<sup>(2)</sup>

会話分析を武器とするエスノメソドロジーにとって、参照すべきは言語であり、いまやシュツツでもガーフィ  
ンケルでもなく、ヴァイトゲンシュタインである、ということになるだろうか。

何か有意なことを言ったり、あるいは他の人が言うことや何かで読んだことを理解したりするのに、い  
かなる論理的もしくは倫理的な道具立ても、必要ではない。またじっさい、ふつうわたしたちは、そのよう  
な道具立てを使っていない。ことばだけで十分なのだ。ある部屋の記述を理解するのに、ある部屋のイメー  
ジを思い浮かべる必要はない。「痛み」や「黄色」(「ということば」が何を意味するか理解するのに、痛みや  
黄色のサンプルをもっている必要などない。ある表現を理解するのに、別の表現に翻訳する必要もなければ、  
そこにどんな規則があるのか推測したりすることも、またそれがどんな規則か解釈したり、それをわざわざ  
適用してみたりする必要もない。わたしたちは、言語を、あるがままに理解するだけである。<sup>(25)</sup>

後期ヴァイトゲンシュタインの思想からすれば、彼は自然言語の操作を、いわば「自己充足」するものとする考  
立場をとっている。

## 五 おわりに

エスノメソドロジストではない筆者が、にわか勉強でシュツツ、ガーフィンケルそしてエスノメソドロジーを

自明なことを凝視する先に何が見えるのか

自明なことを凝視する先に何が見えるのか

称する研究文献を少しばかり読んでみて、最初の問いに帰るとき、中途半端な実証主義、質問紙と数量データと統計分析で社会調査をこなすことに大きな疑問と批判を感じた彼らに共有できるものを抱く反面、現象学的社会学の方法が相互作用する個人だけにあり、それもエスノメソドロジーの場合、数分の会話の音声、身振り、表情からどれだけのものを読み取ることができるとかの勝負になっていることに、ある種の戸惑いも感じる。

ここで参考までに、D・フランシスとS・ヘスターの初学者向けの教科書『エスノメソドロジーへの招待』にある、「主流の社会学」から浴びせられるエスノメソドロジーへの三つの難点をあげてみる。それは次のようなことである。

- (1) わかりにくさ…エスノメソドロジーという語を含め、ガーフィンケルが提示したアカウンタピリテイ、インデキシカリテイ(文脈依存性)、リフレクシビリティ(相互反映性)といった用語や概念がわかりにくく、主流の社会学からは風変わりなものと見られるという批判。
- (2) 不完全さ…エスノメソドロジーは人々の活動に研究の焦点を合わせるが、社会構造を無視している。つまり「ミクロな」相互行為だけを記述し、「マクロな」社会構造を見ようとしていない、という批判。
- (3) 素朴な経験主義…エスノメソドロジーの研究が重視する、相互作用の活動を生起している状態のまま記述するだけという方法上の姿勢は、理論を必要としないという素朴な経験主義であるという批判。

これらは旧来の実証主義や主観・客観二元論に立つ「主流の社会学」から、エスノメソドロジーがまったく異

端と見られた時代を反映しているが、エスノメソドロジストは当然力を込めて反論している。筆者からみても、現在の社会学の水準からすれば、エスノメソドロジーへの理解が進み、この三つの難点はおおかた克服されていると言ったら言い過ぎだろうか。

エスノメソドロジー派内部での議論はいろいろあるのであろうが、筆者は外部の者としてその違いまではわからぬし、立ち入る気もない。ただ、こうしてシュツツ以降の現象学的社会学の歩みを自分なりに考えてきて、当面こういうことなのではないか、という点を最後に記しておきたい。それは、ガーフィンケルの「キャリアトラブル」ではないが、日常性の経験に即して記述し考えるというエスノメソドロジーの態度のリアルとフィクションの同一性という問題である。エスノメソドロジーからすれば、一方で経験的社会調査の大前提、まずは目の前で起っていることを正確によく見るということ、他方でいくら対象を凝視してもそこから見えてくるものは、見ているこちらの視点や視野によって変つていくという問題である。ここでは、そのことをひとつの例で考えてみる。

素材はあるTVドラマである。これは角田光代の小説をもとにした「紙の月」という五回連続ドラマ作品だが、大筋はこういう話である。主人公は多忙な商社員の夫をもつ四〇歳前後の主婦で、金銭的に不自由はないのだが子どもがいないので銀行員のパート社員になったという設定である。彼女は有能で裕福な顧客を訪問しては預金を獲得する。夫は妻が退屈しのぎで仕事をするのを喜んで承認し、彼女は資格を取ってさらに仕事に励む。ある日、高額な化粧品を購入する際に、顧客から預かった現金を一時借用したことをきっかけに、人の金をこっそり手に入れる経験を身につけてしまう。そして、偶然出会った若い男子学生が好意を寄せてくるなかで、彼が金銭に困っていることを聞き、大金を与える。次第に彼との関係を深めるなかで、自分が裕福でいくらでもお金を使

自明なことを凝視する先に何が見えるのか

自明なことを凝視する先に何が見えるのか

える境遇にあることを示すために、銀行預金者の巨額の預金を横領することをやめられなくなる。ドラマは、彼女を信頼する高齢の顧客や、金銭に振り回されることで精神の危機に晒される彼女の高校の同級生などをちりばめながら、この一億円横領事件の犯罪者となる主人公の行動と心の動きを描いていく。これは作者が実際にあったいくつかの事件を参考にしたというものの、ノンフィクションの記録文学ではなく、むしろそうした実録文学に対して、別の視点を対置することを意図した創作だと明言している。

フィクションとしての物語は、作者がさまざまな経験的観察からひとつの有意味なストーリーを整理して、読者あるいは視聴者にある種の統一的感情を与えるように構成するものである。それはそのような作者の意図による構成であるかぎり、現実そのものとは違うのだが、では現実そのものとはなんなのか？ 顧客の前で優しく賢く合理的に振舞う銀行の外務員も現実であるし、若い愛人の前で裕福な庇護者であり愛に溺れる女を味わうのも現実であるし、何も知らない夫の前でもはや共有できる感情のないことを自覚するのも現実であり、預金証書を偽造し露見を恐れてさらに犯罪を重ねるのも現実である。われわれはそれをかなり正確にリアルなものとして理解できる。そして最後にすべてを棄てて、バンコクとおぼしき海外に逃亡して自分の行動を反芻する主人公の心境も、多くの観客は到底共感はできないとしても理解は可能だろう。それは、倫理的道德的な社会規範の自明性を意識しつつ、それとは次元の異なるリアリティにも響いてくるものを感じるだろうか。

現象学的社会学があえて無謀にも、非情な社会科学に持ちこもうとしたのは、このような日常生活世界にあふれている多様で複雑なややこしいリアリティを、実はわれわれは素直に凝視すれば誰でも理解しているではないか、ちゃんと理解できるではないか、ということなのではないか。そして、ここに拘っていくと、世界の見え方

自身が少しだけ変わってくる。この「紙の月」でいえば、このような事件に対して、まず世間の与える評価は、「子  
のないアラフォー主婦の心の闇」、「若い愛人に溺れて貢ぐ愚かな中年女の犯罪」、「まじめなお嬢様育ちの美人O  
Lの転落」といった判で押したようなステレオタイプの言葉の嵐である。われわれの社会を秩序として構成して  
いる言説の大半は、こうした紋切り型の通俗社会心理学的説明で維持されている。それは「主流派の社会学」が  
やっている専門用語としての、社会現象を説明する概念や用語よりは通俗的だろうが、基本的な認識態度は共通  
している。

エスノメソドロジーの知的挑戦は、このような浅薄な言語の暴力に対して、当事者が今ここで感じたり話した  
り行っていることは、そういう上からの概念や型通りの道徳的枠組みをいかに解体し、人がそこで生成し創生し  
ている何かを取り出すことにあるのではないかと思う。会話分析の試みは、どこまで社会学的方法として有効か  
筆者には今のところ判断できないが、仮に「紙の月」から会話と独白を拾ってみるとこうなる。

(1) 二人が逢う居酒屋のシーン

01 光太…「子どもとかは…いや、ごめん、いろいろ聞いて…」

02 梨花…「いないの、ほんとは欲しかったんだけど…。でも、どうかな・最近・わからなくなってきた」

03 光太…「え？」

04 梨花…「ほんとに子どもが欲しかったのか…うん・欲しかったんだけど…」

でも、もしかしたら…子育てをすることで、何かになれるって…思ってたのかもしれない」

自明なことを凝視する先に何が見えるのか

自明なことを凝視する先に何が見えるのか

05 光太：「何かに？」

06 梨花：「この世界で必要とされる・何か…」

07 光太：「必要とされてないと思ってるの。もしかしてだけど・梨花さん、自分が嫌いなもの？ 前にも言ってたよね、自分はダメな人間だって…」

08 梨花：「変わらなきゃとは思ってる」

09 光太：「どうして？」

10 梨花：「どうしてって、こんな・何のとりえもないし、いてもいなくても同じような…」

11 光太：「変わらなくてもいいよ。梨花さんは…梨花さんは、梨花さんでいい。そのままの梨花さんでいてほしい。俺じゃ…だめかな？ 俺だったら、梨花さんにそんなふうには絶対思わせない。俺には梨花さんが必要だから…」

この会話は、やや長くて会話分析としては少々複雑になるが、01行目の「子どもとかは…」という問いかけに始まり、02行目での隣接ペアはむしろ梨花が、光太の問いへの答え以上の発展形態を展開する形ですすむ。04～05行目で間を置いた梨花の発言は、「子ども」という問いへの直接の答えではなく自分の存在の意味の方向に移行して、自問自答のようなりフレクシヴな色合いを深める。06～07行目では、梨花の自己認識の否定的ニュアンスと、それに反撥して肯定的な自己呈示がしたいと感じた光太が現れる。そして最後の11行目で、光太は反転してここまでの梨花の懐疑的な自己呈示を否定して、積極的な誘いを一気に行ってしまふ。このプロセスにおいて

生成されている相互行為の質は、シナリオを描いた脚本家の創作になるものだから、現実に関わされた会話よりやや整序されているかもしれない。しかし、これを見る者はそのリアリティを無理なく理解できると思うだろう。

このあと、TVのドラマ映像にかぶせて二人が結ばれた翌朝の梨花の独白が流れる。

私は自由だ。唐突に：そう感じた。心の底から指の先まで充たされたあの日。私を感じていたのは、罪悪感ではなく、大きな解放感と、そして、それよりも大きな万能感だった。もしかしたら私は、やろうと思っただことを何でもやれるのかもしれない。行こうと思っただ場所に、どこへでも行けるのかもしれない。後に何度思い返して見ても、私の中の何かを変えてしまったのは、この得体のしれない私の中の万能感であったよ  
うな気がしてならなかった。

エスノメソドロジーについて、やや斜めの角度から見てきた本稿のまとめとして、この例から会話分析の方法としての独自性と有効性への、何か足りない点があるとすれば何か、という問題を示唆しておきたい。それは、「語る」と「書くこと」の違いになるかと思う。会話分析は「語ること」あるいは「話された言葉」のやりとり  
に焦点を絞るといふ戦略で、社会学という学問の方法を現象学的また言語学的な方向に転回させようとした。それはたんにどんな研究対象にも応用可能な「技法としてのエスノメソドロジー」へと洗練され発展していったのだが、同時に書齋の思弁ではなく経験的  
社会調査あるいは実践的ムーヴメントを近代科学への根底的批判として、

自明なことを凝視する先に何が見えるのか

自明なことを凝視する先に何が見えるのか

調査研究を「思想としてのエスノメソドロジー」にまで樹ち立て鍛えようという、ガーフィンケル以来の精神を継承していたのかもしれないと思う。

もし筆者がエスノメソドロジストにはなれない理由を表明しろと言われたら、少々苦味を噛みしめながらこう言うだろう。ある日あるときある場所で「話された言葉」を、社会学のデータとして精密に扱うことの意義は理解できる。社会的行為の動機の意味理解、という厄介な問題について、エスノメソドロジーはひとつの方法論的な答えを与えている。でも、「話された言葉」から読み解く秩序あるいは秩序の生成とは、いまここの出来事の実分析であって、それとは少し別の現実を捉える方法もあるはずである。

「紙の月」の例で言えば、二人の相互作用としての切り取られた「私的会話」に対して、構築された声にならない「独白」という表現があり得る。そこでは自分の行為について、金銭を横領する規範侵犯の「罪悪感」よりも、夫を裏切る不倫という「倫理観」よりも、それまでの自分が囚われていた精神の拘束からの「解放感」を実感し、さらに自分には何でもできるのだという「万能感」が語られる。しかしこれは「独白」という形以外にはありえず、もし相互行為としての「会話」において語られたときは、たちまち深刻な齟齬や制裁を呼び起す。それは作家によるある斉合的な一貫的な構築が行われた作品なのであり、だからこの「独白」は、アートとしての創作として作法的に語られなければならない。もしこうした当事者の「独白」が社会的に扱えるデータになるのだとすれば、それは実際に話された会話ではなく、「書かれた言葉」文字によって書き残された「独白」しかないだろう。社会学には書き残された「独白」を、ドキュメントや生活誌、あるいは聴き取りを書き残すライフ・ヒストリーという一連の研究があることは、これまでも触れてきた。<sup>(26)</sup>それらとエスノメソドロジーには、親近性と方法的な

共通性があるのだが、同時に基本的に立場を異にする面がある。

われわれはある静かな場所で、誰にも邪魔されずに自分の過去や未来について想いを馳せる時間をもったとき、何か自分にとって意味のある命題を考え、それを秘かなつぶやき、「独白」として言葉にするだろう。しかし、多くの場合それは書き残されたり具体的な記録に残ることなく、時間の経過とともに消えてゆく。それはあくまで目の前の他者との会話のような相互作用の場面で行われたことではなく、「反省的空想的な特殊な時間の中での私的に構築されたな出来事なのだ。だからこれをエスノメソドロジーは、観察可能なデータではないので禁欲的に排除する。それはそれで構わないが、たんなる技法としてのエスノメソドロジーだけでは、運動としての社会学にとって物足りないと思うのは筆者だけであろうか。

#### 註

(1) 科学論としての「新カント派」と呼ばれるものは、一九世紀末から第一次世界大戦の時期にかけてドイツを中心として、カントの哲学を徹底・復興させると唱えて、隆盛だった唯物論や実証主義に対抗しようとした。論者には、マールブルク学派のコーエン、ナトルフ、カッシーラー、西南ドイツ学派（バーデン学派）のヴェインデルバント、リッケルト、ラスクなどが著名。ヴェーバー社会科学方法論との関連では、とくに自然科学と文化科学の区別を唱えたリッケルトが関係深い。リッケルトは自然科学が「普遍化的方法」をとり、歴史的文化科学が「個性化的方法」をとると言った。

(2) M. Hesse, *Revolutions and reconstructions in the Philosophy of Science*, Bloomington, 1980, p.170. 野家啓一「科学の解釈学」講談社学術文庫、二〇一三年、九六頁。

(3) アラン・ソーカル／ジャン・ブリクモン『知の欺瞞』田崎晴明ほか訳、岩波書店、2000年。

自明なことを凝視する先に何が見えるのか

自明なことを凝視する先に何が見えるのか

- (4) 野家啓一『科学の解釈学』講談社学術文庫、二〇一三年、九六〜九七頁。
- (5) 野家は補助線としてハーバーマスの「認識関心」に言及している。「われわれは自然科学と人間科学との二元的区別を固定化するのではなく、むしろ両者を統一的な視座から捉え直すべきことを主張してきたが、それに対してJ・ハーバーマスは、両者の科学の基本的相違を「認識関心」の異なりという特徴に求めている。彼によれば、経験的・分析的科学（自然科学）を先導しているのは「技術的認識関心」であり、そこで求められているのは対象の技術的操作とそれを支える予測可能な知識である。他方、歴史的・解釈学的科学（人間科学）は「実践的認識関心」によって導かれており、その目標は「行動を導く可能な理解をわかちあう間主観性を維持し拡大すること」にあるとされる。確かに、自然科学と人間科学との区別をこれまでのように認識対象や方法論の相違に置くのではなく、それぞれの科学を主導する「認識関心」、すなわち「人類の可能的な再生産と自己構成のための特定の基本的条件」の違いに求めたことは大いに評価すべき事柄であろう。しかし、ハーバーマスがこの認識関心の相違を学問領域の二元性として位置づけるとき、われわれはそれにいささか留保をつけざるをえない。それは先の「科学的方法の二元論」の変奏にすぎないからである。」野家啓一『科学の解釈学』九五〜九九頁。
- (6) Schütz, A. *Der Sinnhafte Aufbau der Sozialen Welt: Einleitung in die Verstehende Soziologie*, Julius Springer, 1932. (佐藤嘉一訳『社会的世界の意味構成—ウェーバー社会学の現象学的分析』木鐸社、一九八二年) なお、邦題がSinnhafte Aufbauを意味構成Konstitution des Sinnsと訳すことで意味を帯びた構築物と、構築作業そのものの混同がやや気になる。
- (7) 「ニュースクール」は一九一八年にコロンビア大学の教育・研究体制に対するアルタナティヴとして、成人向け生涯教育校として作られ、それが三〇年代のナチス迫害から逃れてきたユダヤ系や社会主義者の社会科学者を受け入れる大学として一九三五年に再組織された学校。この点は、那須壽『現象学的社会学への道—開かれた地平を求めて—』恒星社厚生閣、一九九七年、一五〇〜一五一頁参照。
- (8) 盛山和夫『社会学的方法的立場—客観性とは何か』東京大学出版会、二〇一三年、一一二〜一一三頁。
- (9) 盛山和夫、『同書』二〇一三年、一一四〜一一五頁。盛山は、廣松のこの「ないものねだり」を知りながらのこだわりを、「埋蔵金が見つからなかったことを知った上で、なおかつ埋蔵金探しのドキュメンタリー番組を放送し、視聴者に最後まで見続けようため、「もしかすると見つかったのかも知れない」という期待を抱かせる工夫と同じ」と酷評する。
- (10) A・シュッツは『社会的世界の意味構成』第一章で、この研究の意図を「理解社会学に従来欠落している哲学的基盤を与え、

現代哲学の確かな成果によって、この理解社会学の根本的な見地に梃子入れすること（邦訳五九頁）と書く。この表現がシュッツの哲学的な研究意図と誤解される部分でもある。また佐藤嘉一はこの3点の他に、(4)として理解社会学の方法の問題を付け加えている（訳者解説）。

- (11) 廣松渉『現象学的社会学の祖型 A・シュッツ研究ノート』青土社、一九九一年。廣松はこの五層についてシュッツの行文を整理して以下のように要約している。「(1)他者との関係に先立って行為がそれ自体が内具している意味、これが第一層。(2)行為のWoraufzuの他我性、これが第二層。(3)他者の行動への有意味的定位置imhat orientiert sein an dem Verhalten des Anderen)が第三層。(4)低位三層の意味構造が当事者自身に理解されている(Verhalten)が、これが第四層。(5)如上の当事者にとっての意味を、帰するところは第四層を、学理的観察者が開明的に理解する意味内容、これが第五層。」廣松同書、二六頁。

- (12) H. Garfinkel, The Origin of the term 'Ethnomethodology', 1968. H. ガーフィנקル「エスノメソドロジの命名の由来」(山田富秋・好井裕明・山崎敬編訳『エスノメソドロジ 社会学的思考の解体』せりか書房、一九八七年) 一九頁。

- (13) Garfinkel, H. "Color Trouble", 1940. (邦訳) H. ガーフィנקル「カラートラブル」(秋吉美都訳)(山田富秋・好井裕明編『エスノメソドロジの想像力』せりか書房、一九九八年)。

- (14) 浜日出夫「エスノメソドロジの原風景—ガーフィנקルの短編小説「カラートラブル」」(山田富秋・好井裕明編、前掲書、三四頁)。

- (15) 富永健一「思想としての社会学」第八章「現象学的社会学の思想」新曜社、二〇〇八年、六五二頁。

- (16) H・ガーフィנקル「アグネス、彼女はいかにして女になり続けたか」山田富秋・好井裕明編、同書、三〇五〜三〇六頁。

- (17) ドロシー・E・スミス「Kは精神病—事実報告のアナトミー」山田富秋・好井裕明編、同書、一六〇頁。

- (18) 浜日出夫「羅生門問題」(富永健一編『理論社会学の可能性 客観主義から主観主義まで』新曜社、二〇〇六年、二七一〜二八九頁) 盛山和夫「秩序問題の問いの構造」盛山和夫・海野道郎編『秩序問題と社会的ジレンマ』東京・ハーベスト社、一九九一年。

- (19) 山田富秋「エスノメソドロジの現在」山田富秋・好井裕明編『エスノメソドロジの想像力』せりか書房、一九九八年、七七〜七九頁。

自明なことを凝視する先に何が見えるのか

自明なことを凝視する先に何が見えるのか

- (20) 朴沙羅「おまえは誰だ！」〔社会学評論〕254第六四卷(第二号)二〇一三年、二八二〜二八三頁。
- (21) 西阪仰『分散する身体 エスノメソドロジイ的相互作用分析の展開』勁草書房、二〇〇八年、四二頁。
- (22) 西阪仰『概念分析とエスノメソドロジイ』山田富秋・好井裕明編『エスノメソドロジイの想像力』せりか書房、一九九八年、二二一〜二二三頁。
- (23) 西阪仰『分散する身体 エスノメソドロジイ的相互作用分析の展開』勁草書房、二〇〇八年、二九〜三〇頁。
- (24) 西阪仰、同書、二九〜三〇頁。
- (25) J. F. M. Hunter, "Forms of Life in Wittgenstein's Philosophical Investigations", E.D.Klemke (ed), *Essays on Wittgenstein*, University of Illinois Press, Urbana, 1971, p.283.
- (26) 水谷史男「私的に書かれた「語り」を読む」として社会調査のデータとしての日記と手紙について」明治学院大学『社会学・社会福祉学研究』第一四三号、二〇一四年。

#### 参考文献

- Francis, D. & Hester, S. *An Interaction to Ethnomethodology: Language, Society and Interaction*. SAGE Publication. 2004. デイヴィド・フランシス／ステイヴン・ヘスター『エスノメソドロジイへの招待 言語／社会／相互行為』仲川伸俊・岡田光弘・是永論・小宮友根訳、ナカニシヤ出版、二〇一四年。
- Garfinkel, Harold. 1967. "Studies of the Routine Grounds of Everyday Activities". H. Garfinkel, *Studies in Ethnomethodology*. Englewood Cliffs, N.J.: Prentice-hall. (G.サーサスほか編著 北澤裕ほか訳 一九八九年「日常活動の基礎」『日常性の解剖学』東京：マルジュ社)
- Schütz, A. *Der Sinnhafte Aufbau der Sozialen Welt: Einleitung in die Verstehende Soziologie*. Julius Springer. 1932. (佐藤嘉一訳『社会的世界の意味構成—ウエーバー社会学の現象学的分析』木鐸社、一九八二年)
- Witgenstein, Ludwig. "Philosophische Untersuchungen" Oxford: Basil Blackwell, 1968. (藤本隆志訳『哲学探究』大修館書店、一九七六年)

- 片桐雅隆『認知社会学の構想 カテゴリー・自己・社会』世界思想社、二〇〇六年。
- クルター・J 西阪仰訳『心の社会的構成 ウイトゲンシュタイン派エスノメソドロジの視点』新曜社、一九九八年。
- 盛山和夫『秩序問題の問いの構造』盛山和夫・海野道郎編『秩序問題と社会的ジレンマ』ハーベスト社、一九九一年。
- 盛山和夫『社会学的方法的立場―客観性とは何か』東京大学出版会、二〇一三年。
- 富永健一編『理論社会学の可能性 客観主義から主観主義まで』新曜社、二〇〇六年。
- 富永健一『思想としての社会学』新曜社、二〇〇八年。
- バーガー・P&Lツクマン・T 山口節郎訳『現実の社会的構成 知識社会学論考』新曜社、二〇〇三年。
- 那須壽『現象学的社会学への道―開かれた地平を求めて―』恒星社厚生閣、一九九七年。
- 西阪仰『分散する身体 エスノメソドロジの相互作用分析の展開』勁草書房、二〇〇八年。
- 野家啓一『科学の解釈学』講談社学術文庫、二〇一三年。
- 朴沙羅『おまえは誰だ!』(『社会学評論』254第六四卷第二号)、二〇一三年。
- 廣松渉『現象学的社会学の祖型 A・シュッツ研究ノート』青土社、一九九一年。
- 前田泰樹・水川喜文・岡田光弘編『エスノメソドロジ 人びとの実践から学ぶ』新曜社、二〇〇七年。
- 水谷史男『私的に書かれた「語り」を読むこと―社会調査のデータとしての日記と手紙について』『明治学院大学社会学・社会福祉学研究』第一四三号、二〇一四年。
- 森元孝『アルフレッド・シュッツ―主観的時間と社会的空間―』東信堂、二〇〇一年。
- 森元孝『アルフレート・シュッツのウィーン 社会科学の自由主義的転換の構想とその時代』新評論、一九九五年。
- 山田富秋・好井裕明編『エスノメソドロジの想像力』せりか書房、一九九八年。

自明なことを凝視する先に何が見えるのか

